大湯鉄道　百一周年に寄せて

偉人、傑士の軌道ありてこそ

安部　茂

大湯鉄道物語

作　詞　由布市立西庄内小学校児童
補作詞　首藤政秀
作　曲　首藤政秀

一、線路は続いてる　ぼくの住む街から
みんな住んでいる　素敵な街に
今から百年前　昔の人々が
願いを込めた線路　大湯線

赤や黄色の列車走る　ぼくらをのせて
鉄橋わたり　トンネル抜けて
走る走るよ　ななつ星　ゆふいんの森
いつか　ぼくも　乗りたいな
むかし　むかし　人々が
夢見た鉄道　いまここに

二、由布岳が見下ろす　わたしたちの　ふるさと
大分川流れる　ゆたかな大地
川に寄り添い走り　川をまたいで走る
上り下り行きかう　大湯鉄道

赤や黄色の列車走る　ぼくらをのせて
鉄橋わたり　トンネル抜けて
走る走るよ　ななつ星　ゆふいんの森
いつか　ぼくも　乗りたいな
むかし　むかし　人々が
つくった鉄道　これからも

現在、久大線として、営業運行している列車は、大分川沿いの河岸段丘地域を走っています。それは大分～湯布院まで、鉄道が敷設され、今日に至り、今はディーゼル車が主流であります。

もう昔でしょうが、蒸気機関車が、轟音と共に、力強く疾駆する、雄姿にあこがれた世代の一人です。

文明開化が花開いた時代に、私達の郷

土に、列車を走らせ、人々の生活、暮らしを、楽にしたいと考えた、多くの素卦家や篤志家が、地域に居ました。先頭に立ち、凄いエネルギーと情熱を持ち行動した人達が何人も居ました。

鉄道とは

一八五三年（嘉永六年）アメリカの東インド艦隊司令長官ペリーが七月に、サスケハンナ、ミシシッピ、プリマス、サラトガ等の四隻が浦賀沖へ来航し、日本に通商と開国を求めた。

翌五四年二月（嘉永七年）　今度は七隻の軍艦をひきいて、江戸湾内の小柴沖に現れ、前年の回答を求めた。献上品の一つとして蒸気機関車の模型を江戸城内で行い、河田八郎は、旋転数回と日誌に書いている。

韮山（にらやま）で反射炉（平成二七年七月　世界文化遺産）を造った江川太郎左衛門（英龍）は、将軍家定の前で、運転して見せて、これ以来、鉄道時代に突入した。

それよりも数ヶ月早く、佐賀藩士、本島藤太夫らが、ロシア軍艦を藩主、鍋島直正（閑叟）から視察を命じられ、七寸（二一・二cm）ほどの蒸気機関車を見学している。佐賀藩精錬方は、開明的な藩主の意を受け入れ、近代的な科学技術導入の中心的な機関と成っていった。

佐賀藩以外でも薩摩藩や福岡藩でも、蒸気車模型が制作され、また長洲藩や加賀藩でも蒸気車模型を、何らかの方法で取得している。

鉄道に乗った日本人

ジョン万次郎こと中浜万次郎と浜田彦蔵（ジョセフ・ヒコ）の二名は一八四一年一月（天保一二年）遭難、ほぼ四ヶ月漂流後にアメリカの捕鯨船に救助されて、一八五〇年万次郎はカリフォルニアから金山へ入る事を目的にサンフランシスコから汽船でサクラメントに向かい、そこで鉄道に乗り換えている。鉄道について実に細かい観察をしている。万次郎は取り調べの中で鉄を敷設し、鉄路（レール）の上を蒸気力によって、けん引される汽車が走り、その速度は、一日に三〇〇里、一一七八kmを走るという速さであり、三〇〇里はほぼ江戸から福岡までの距離に匹敵するので、当時の人達には想像出来ない、速さであった。

万延元年の遣米使節

一八六〇年（万延元年）一月咸臨丸で、勝海舟、福沢諭吉、ジョン万次郎達一行は、品川沖を出航、同年一月二十日、日米通商条約批准書交換の為、新見豊前守正興を正使に、小栗忠順などが、米艦ホーハタン号に乗ってアメリカに行き、同年四月二六日にパナマ～アスピンウォール間で鉄道に乗っている。

〝汽笛一声新橋を〟　日本に鉄道が走り出す

一八七一年（明治五年）十月十四日開業式典を、新橋駅に於いて、明治天皇の御臨幸のもとに、鉄道頭（てつどうのかみ）、井上勝より鉄道図一巻を受け取ると、高官を従えて乗り込んだ。蟲音と共に

とてつも無い速度で走り、西洋文化の何たるかを肌で感じた。
それから汽車と電気を普及させる事こそが文明開化であるとして、伊藤博文、大隈重信、前島密、渋沢栄一らが、不平士族をなくする為の富国強兵、殖産興業と相まって、至る所で鉄道が普及することとなった。

鉄道院の誕生

一八七一年に工部省鉄道寮→工部省鉄道局→内務省鉄道局となり、変遷と改組を繰り返し、一九〇八年（明治三十九年）、鉄道院と成る。初代総裁は、後藤新平である。部局の改編等あったが、札幌、仙台、東京、名古屋、神戸、門司の六鉄道管理局となる。一九二〇年（大正九年）、鉄道省令により、大湯鉄道も、僅か七年で、国有化と成って行った。
明治二二年には、新橋～神戸間が完成し、一九〇六年（明治三九年）には、鉄道五〇〇〇マイル祝賀会を挙行、延長は八一六二㎞に達した。
大湯鉄道は、一九一二年（大正元年）に発起人総代、小野駿一に、鉄道免許状が下符（大分市～速見郡湯平村間、一九一五年（大正四年）、大分市～小野屋間を開業、大分市駅～古国府停車場～永興（りょうご）停車場～賀来駅～平横瀬停留場～向之原駅～鬼瀬停留所～小野屋駅が開業、一九一八年（大正七年）、森ノ木停留場が開きます。
開通の日の祝賀ムード一杯　喜びの顔が浮かぶ中に、私の曽祖父、中尾の村会議員の安部由平や賀来村助役を拝命の国分村田向の江良久市は私の家内の曽祖父達が、村民挙げて、紋付羽織袴に威儀を正して、開業を祝したであろうと想像する。

明治版「三国志」桃園の契りあり

文京区駒込千駄木大給（おぎゅう）子爵邸に赴いた、小野駿一は、長身にて、色あくまでも白く、歌舞伎役者もかくやあらんかと言う、美男子である。父小野吉彦は、県議会議長二期、改進党の代議士、第二十三国立銀行にて士族代表の初代頭取、渡辺雄次郎に次いで二代頭取二十三銀行は、のちに大分銀行となる。小野駿一は明治四一年、大分銀行の取締役となり、一九一五年（大正四年）大湯鉄道開業の年に、小野駿一、三三歳にて第四代頭取となる。五代頭取として（大正一三年から昭和二年）広岡慶三がなる、このひとはＮＨＫ、朝ドラ「あさ」の娘「千代」の婿養子である。
大給子爵（後に伯爵授位）は慶応年間に、松平姓を大給に改める、神奈川県高座郡藤沢村鵠沼（くげぬま）に、相州炮術調練場の二十五万坪という広大な土地を明治政府より払い下げを受けて、御用邸を計画せるも土方伯爵案の葉山御用邸が決定したので、この土地を伊東将行と、分譲を計画し、湘南の風光明媚もあり、江ノ島電鉄が走る地区と成って行く。
小野駿一は、明治四十年二月に、「雨敬」（あめけい）こと雨宮敬次郎率いる、江之島電気鉄道の極楽寺隧道開通祝賀式典に大給子爵よりの紹介状を江之島電気鉄道初代社長、青木正太郎、鎌倉郡郡長、

片瀬の大地主の山本庄太郎宛てを胸に会う事に成っていた。

境川を挟んで右岸、鎌倉郡片瀬村、左岸、高座郡藤沢村鵠沼地区、山本橋を渡り、宏壮な山本邸に入り、庄太郎氏に会い、明日は、長男の江之島電気鉄道専務取締役四〇歳、百太郎氏に話を付けてもらうこととした。

百太郎氏は雨敬の懐刀として有名である。

明治二八年、雨敬は京都桂川電力を興し、京都市電を日本で最初に走らせ、東京市街鉄道社長として、星亨（帝国議会二代目議長）、利光鶴松（大分市稙田村粟野出身、小田急電鉄創立者）の尽力に依り車輌一八〇〇輌、延長一二〇マイルの日本一の規模の電鉄会社の社長でもある。雨敬は三一歳の時、アメリカに渡り、大陸横断鉄道に乗車、走破しており、あれから二九年、六〇歳、熊のような大男と評されているが、羆の如き全身から発するオーラは、とてつも無い力を生み出す。

鵠沼の守り神として明治三八年　賀来神社は大給松平家より移している。社名の扁額は、勝海舟が拝書し、勝海舟安房の署名がある。（この事は、後日、勝海舟、坂本龍馬の豊後鶴崎から肥街道→長崎伝習所→亀山社中編として記したい）勝海舟伯爵授位の時書いたのです。

小野駿一は鵠沼石上の賀来神社（善神王宮）詣で、柏手を打ち、歩いて江の島神宮へ参り、今日は、岩本楼へ泊る、鎌倉側には〝名将（新田義貞）が剣投ぜし古戦場、稲村ヶ崎　三年後の明治四三年には逗子開成のボート沈没の、世に名高き〟七里ヶ浜の哀歌、真白き富士の嶺、緑の江の島の歌詞で有名な海難事故があり。さて、小野駿一は、平塚、大磯の海辺を遠望、茅ケ崎の烏帽子岩の先には、白雪を抱いた、霊峰富士が、天地をつなぐが如く、そびえ立つ。小野駿一は、山本鉄舟の一首、「晴れて良し、曇りても良し、富士の山、もとの姿はかわらざりけり」を口すさむ。

緊張の中に、ゆっくりと江の島神社の神徳を感じつつ、眠りに入っていった小野駿一であった。

ここに極楽寺隧道の事を少し述べる。

極楽寺～長谷（小町）間は難工事である。賛成、反対両論あったが、主任技師に工学士、大井治男を迎えて、その指導のもとに、ツルハシを用い、全工程を人力で、鎌倉特有の固い岩層を掘り抜いた。コンクリートは配合をセメント、砂、砂利を1対3対6にて行い、

極楽洞開通記念写真

構造規模
構造形式／単線断面/レンガ造
内空高／5,285mm　　内空幅／3,940mm
左より２人目　立川甬、中央　雨宮敬次郎
車内左３人目　根津嘉一郎

覆工にはレンガを使用、巻立を行い、二〇九mを十一ヶ月間昼夜兼行でのすえ明治四〇年二月に完成する。

開通した隧道の藤沢方には「極楽洞」。鎌倉方には「千歳開道」という名を持っている。後に伊藤博文に次いで二代韓国統監となる、曽禰荒助（極楽洞）、第四代内閣総理大臣松方正義（千歳開道）の書によるもので、当時の原形を、とどめ、現在も刻されている。測量及びトンネル工事を担当したのは豊後国速見郡南由布村平地区に生まれた立川甬（たつかわとうる）である。

喜びが溢れる江之島電気鉄道本社応援室に、通された、小野駿一は、先ず、山本百太郎に挨拶する。正面に居た、雨敬はゆっくりと立ち上がり「子爵より話は聞いている、大分の人には、利光鶴松、中上川（なかみがわ）彦次郎、朝吹英二達に世話になっている。鉄道を造るなら今日は甲州の根津嘉一郎も居るし、立川甬も居ることだ、ゆっくりしていけよ」と大きな体を、隣の江之島電気鉄道、初代社長の青木正太郎と山本百太郎に、笑顔を向けた。

葛飾北斎の江の島絵図

小野駿一は、長身にして、品の良い、モーニング、ネクタイ姿のその人が、握手を求めてきた。この人こそが、東武鉄道創立者にして、後に全国に二一社の鉄道株主となり、大湯鉄道経営に参画、株主となる根津嘉一郎、時に四七歳、四四歳にして衆議院議員初当選以来四期連続当選、勅撰議員。根津嘉一郎は、立川甬が、明治三八年東武鉄道創立事務方として働いていてくれた事に深く感謝の念を抱いていた。小野駿一に対して、根津嘉一郎は「大分でも鉄道を造りなさい。私も協力は、惜しまない」と言った。その時、山梨県東八代郡一宮町（現笛吹市一宮町）出身の早川徳次（のりつぐ）が君と同じ早稲田に居るから、話を通じる様にするよ」との言葉あり、後年、早川徳次と肝胆相照らす仲に成るとは、この時小野駿一は知る由もなかった。

広い応接間に雨敬は立川甬を呼ぶ

立川甬は、雨敬の書生として働き、その才能と進取の気性を認められ、アメリカにて、本場の鉄道工学を学んだ、刻苦勉励の人である。千住馬車鉄道、東京日比谷公園造営監督、熱海軽便鉄道株式会社支配人、浜松鉄道支配人、江島電気鉄道支配人になるが、この時は、極楽寺隧道工事の監督として、完成の喜びの日を迎えていた。小野駿一は、久し振りの大分方言で話した。年齢は四九歳、見るからに実直そうな村夫子然とした人柄が顔に見える。長髪に背広、

チョッキ、左手には、テンガロンハットを持ち、デニムのズボン、つまりジーンズであり、紺色の生地には、後にゴールドラッシュのロゴを小野駿一にみせて、ニヤリと笑った。

早川徳次（のりつぐ）との邂逅

小野駿一は明治四〇年十月、早稲田大学創立二五周年記念の大隈重信公大礼服姿の銅像の除幕式と併せて校歌「都の西北」が発表された制定記念祭に参加していた。すぐ後ろに居る人が早川徳次であることに気付く、根津嘉一郎より、話を聞いている旨を話すと、新宿淀橋のソバ屋で、食事をした。二人共、政治家の子息であり、懐中は、まあまあであるので、もりそばではなく大盛のざるそばにし、そば湯も沢山飲んだ。

早川徳次は、一宮町出身であり、六高（現　岡山大学）へ進むが病気退学、兄の居た早稲田大学へ来た。学究肌の小野駿一は早稲田政経学科卒業後、講師となり、明治四三年に「貨幣論」を上梓する。根津嘉一郎よりの話もあったので、二人はすぐに打ちとけて、九段下の千代田会館の小野駿一の宿へ寄り、新橋～浜松町へ出て、「め組の喧嘩」で有名な、芝明神神宮へ詣でて、大門をくぐり、広大な増上寺を飯倉片町へと抜け神谷町を過ぎて、徳川家康が創建した愛宕神社へ男坂を登り詣でた。

二人で過ぎにし日々と未来を、語り合った。

早川徳次は小野駿一より二歳年上であるが、早稲田法律科卒業後、鉄道院総裁の後藤新平の書生となり、大正三年一九一四年、ロンドン、ニューヨーク、フランスと、地下鉄を視察し、持ち前の実行力で、渋沢栄一、後藤新平、根津嘉一郎の協力を得て、東京地下鉄道を創設した。現在、東京メトロと成っている。上野～浅草間（一九〇二年昭和二年）に地下鉄開通を見る。

小野　駿一氏

早川　徳次氏

大湯鉄道に列車来る

小野駿一と立川甬、早川徳次はまさに「三国志」の劉備、関羽、張飛であり、根津嘉一郎が諸葛亮孔明であろうか。後に大湯線は、

東武佐野鉄道株式会社より中古車輌、機関車二台、三等客車五台、三等郵便合造車二台有蓋車一六台、無蓋車一二台は、早川徳次が、明治四三年佐野鉄道に支配人として根津嘉一郎に招聘された時に小野駿一との友情、厚誼に感じ入り、段取りをしたものである。

写真は近藤藤一郎氏所蔵である、左から、立川甬（テンガロンハットを持っている）早川徳次、小野駿一、根津嘉一郎らの姿が見られ極楽寺隧道の運転手英国人、エドワードの姿あり、五三人の集合写真であり、大湯一号の機関車が見えるが、さぞ壮大なセレモニーであり、館林駅頭に於ける、盛大な機関車等の出発式があった。

車輌譲受認可申請

大湯鉄道株式会社

今般東武鉄道株式会社ヨリ左記機関車及客車、貨車、ノ譲受相候ニ付之ヲ譲受使用儀特別ノ御詮議ヲ以テ御認可戴度書面を添付申請候也。

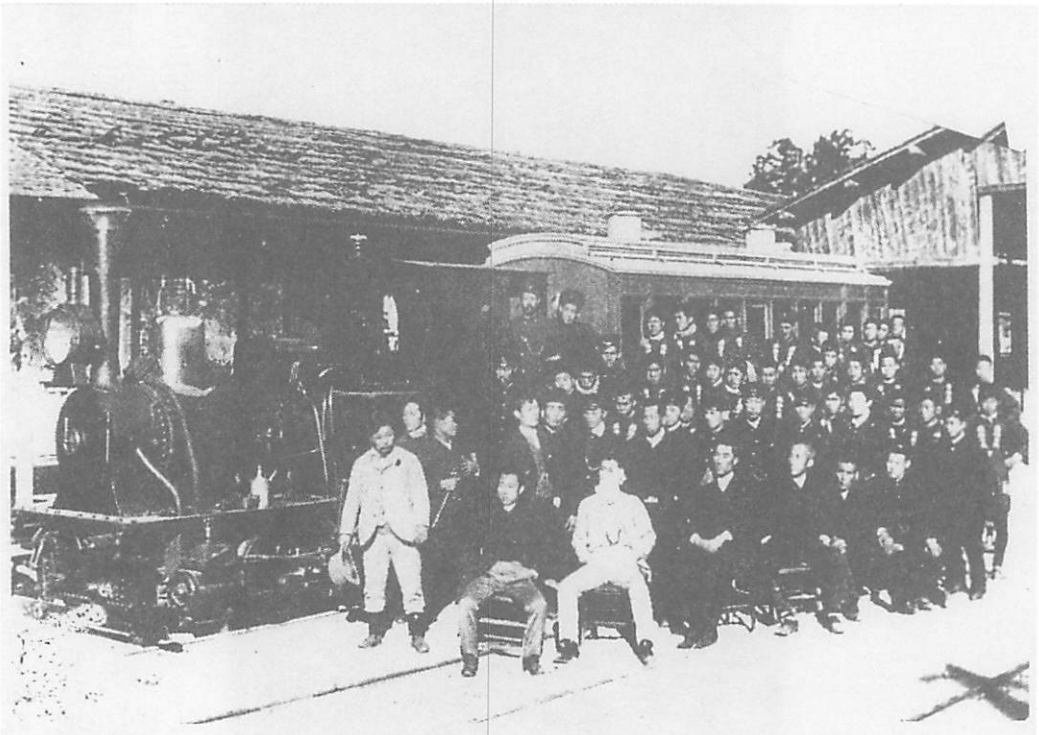
記

四輪タンク機関車　弐台
三等客車　五台
有蓋貨車　拾六台
三等郵便合造車　弐台
無蓋貨車　拾二台
前記車輌内訳
追って費用支払ノ途、建設費車輌賃有之候

大湯鉄道株式会社

大正四年四月一日　取締役社長　小野駿一　印

内閣総理大臣　伯爵　大隈重信殿



大湯鉄道購入前、東武鉄道時代の大湯１号と客車

大湯線は何を目的としたか

小野駿一は、明治四三年十月下旬に石城川村、第九代目村長、宮崎龍平氏宅に居た。鉄道開削の打合せで、地図を持って来たのである。後年、末娘を宮崎家へ嫁すことと成る。

秋風を感じながら、石城川を流れる河沿いには、泉橋と落合橋がある。丁度中間には、宮崎家の菩提寺である吉祥山維福寺がある。山門の所に立って見れば、清澄なる青空の中に、真っ直ぐに上る噴煙を見る。方向は、西南、硫黄岳（星生山）である。（この年より八五年後、平成七年十月に大噴火をすることになる）当時、硫黄は、天然の鉱物として、生産量は、アメリカ、スウェーデンに次いで、世界三位の産出量があり、日露戦争勝利に依る国威発揚の気運あり、用途として、マッチ、火薬等、需要の多きを感じた。すぐに宮崎龍平氏に高崎山の山道を、村人を雇い頂上まで至る様にする。翌日、紅葉に染まり始めた山頂に立った小野駿一は、先ず噴煙の方向を眺める。

そして、一言「天地（あめつち）の神仏あらば、我に力を与うべし、測海量山」と大音声にて叫ぶ。持って来た大矩（おおがね）で測る。正接法（tan）で、数値は対数（ログ）で解く方法は、東京で早川徳次より教わっていたので計測する。真北より二三六度の方向、地図上の距離、山頂より三二㎞の位置にあり、同方向、二七㎞に平治岳、山頂を見る、そのほぼ直線状に庄内駅の予定地が一三㎞にある。産出するであろう硫黄は湯平駅より、早川徳次に頼んである、有蓋車、無蓋車二八輌にて運ぶ様にする。湯平駅は、真北より二五一度、一六㎞であり、その先には涌蓋山三五㎞を見る。そうして、小野駿一は、宮崎家へ帰り、方向角と距離に依り座標値を割出し、野帳を算盤にて計算し、網図を曳き、硫黄岳～湯平駅まで一六㎞を割り出した。

久住町史に依れば、国営にて昭和一五年～一八年迄、硫黄精錬を行うが、第二次大戦の影響に依り中止とある。その宿舎が、現在の赤川温泉です。また行政区を硫黄岳頂上とする九重町によると、昭和四三年まで硫黄の採掘を行っていたとの事。調べてみると、昭和四六年にて天然の硫黄は全て化学製造に変換されていました。これはあくまでも言伝えでありますが、湯平温泉の、工藤三助翁が造った「石畳」を硫黄街道と呼んだとの事。

私の手元に大正三年発行の大分縣報がある。これには「大湯鉄道株式会社起業に係ル軽便鉄道施設ノ為収用セル土地細目左の如シ

金池～元町～古国府～太平寺～三ヶ田～深河内～市～五反田～六重原～旗鉾～田向～平横瀬～下大六～見取～椋木原～茶屋場～楪木～東長宝迄ある。これは奇しくも、大給松平家の前藩主、日根野織部正吉明公の開削した初瀬井路の水源まで来ている。公の上野弥栄神社の祭礼にて農民の困窮せざるを見て、四六日間延べ九万三三〇〇人にて開削し、通水成ると「幾久し吉明られし初瀬川流れを受けて民も栄えん」と詠んだと言われる。

小野駿一は、土地収用、登記等、本当に大変であったであろう。そのエネルギーはどこから出たのでしょうか。県北の、和田豊治、山口半七等と手を結び、成清博愛とも協力関係を築き進んで行く。

株主の中に成清博愛（なるきよひろえ）杵築市山香町立石の馬上金山の社長である。大正五年に没する。金山王として、名を為すがそれまでは、炭鉱に倒れたる事六回、金山に躓きし事四回、財産差し押さえに逢いし事二六回　破産宣告の申請二回、しかし天の試練に当たり、初一念の貫徹に務めんとある。明治四三年一二月一五日、日豊線が宇佐～立石間まで開通し金鉱経営に利便を与える。大正四年には月に今の金に換算すると一二億円、四〇〇〇万円／日である。ゴールドラッシュここに極めり。二〇〇株を大湯鉄道に出資する。日立迄、日出より、船で運ぶが、これが佐賀関精錬所が出来る様、久原政之助に働きかけをする。

日出に的山荘を立てた事は有名である。

成清博愛が、大湯線に投資した事により小野駿一もまた、国東鉄道に監査役をして名を連ねる。

大給家のはなし

版籍奉還後、大給家は参勤交代、大名行列の衣装を賀来神社へ寄贈する。卯酉（うとり）の年には一一日間の祭りは絢爛豪華な、行列絵巻が行われる。子午（しご）は南北、卯酉は東西、二つ合わせた時トヨタのマークに似ていると思うのは私だけでしょうか。

多くの人達の知恵とお金と時間に依って、久大線は、永遠に走り続ける。僅か七年間ではあるが軽便鉄道建設補助法が明治四四年の補助金五％の公布がなされ、小野駿一が社長、副社長に挾間町出身の代議士佐藤庫喜、専務取締役立川甬、取締役根津嘉一郎、成清博愛、等、監査役に石城川村の宮崎龍平である。

特に立川甬は、愛郷の心強く、五七歳にして大湯鉄道入社、一七年間、豊後中村駅完成まで、七四歳にて草加へ帰り昭和一七年没する。郷土の偉人、傑士として私たちはもっと顕彰すべきであろうと思う。

大湯鉄道に於ける株主や乗客の気持ちが一つに成って、我郷土の地に鉄道が走り、今日に至っている。それは未来を乗せて走り続ける。

参考文献

老川慶喜著
日本の鉄道史
江ノ電百年史

関連唱歌歌詞

鉄道唱歌

作詞　大和田健樹
作曲　多　梅稚・上真行

一、汽笛一声新橋を
　はや我（わが）汽車は離れたり

愛宕（あたご）の山に入りのこる
月を、旅路の友として

二、右は高輪泉岳寺（たかなわせんがくじ）
四十七士の墓どころ
雪は消えても、消えのこる
名は千載（せんざい）の後までも

九、北は円覚（えんがく）、建長寺（けんちょうじ）
南は大仏星月夜、片瀬、腰越、江の島も
ただ半日の道ぞかし

七里ヶ浜の哀歌（大正五年作）

作詞　三角錫子（みすみすずこ）

一、真白き富士の嶺、緑（みどり）の江の島
仰ぎ見るも、今は涙
帰らぬ十二の雄々しきみたまに
捧げまつる、胸（むね）と心

二、ボートは沈みぬ　千尋（ちひろ）の海原（うなばら）
風も浪も小（ち）さき腕（かいな）に
力も尽き果て、呼ぶ名は父母
恨みは深し、七里ヶ浜辺

文部省唱歌「鎌倉」（明治四三年）

一、七里ヶ浜のいそ伝い
稲村ヶ崎、名将（めいしょう）の
剣投（つるぎとう）ぜし古戦場

二、極楽寺坂越え行けば
長谷観音（はせかんのん）の堂近く
露座の大仏おわします